
君との友情の為に魔族を統一しようと思った ぱーと2

ピヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君との友情の為に魔族を統一しようと思った ぱーと2

【Nコード】

N3935Y

【作者名】

ピヨ

【あらすじ】

以前投稿した短編の続き。

悩める魔族を宥める魔王。意味深な魔術師。追い出された勇者。秘密を抱えた魔王は勇者との友情を、仲間達との信頼を守る為に奔走する。 というあらすじ詐欺のアフォっぱい話、シリアス風味添え。

（前書き）

以前投稿したものの続きです。

先にそちらを読んでいただいた方が分かりやすいと思います。

あらずじとしては、勇者と友人になった今代魔王が正体を隠して共に旅（魔王討伐）をし、友情を深める為に困難は必須、と考えて他の魔族に一行を襲わせている話。

魔王様はアフォで善良。

以上を踏まえて読んでいただけましたら幸いです。

俺はアーヴィング！

友人である勇者・ディックとの友情を深める為に、四人の仲間たちと魔王討伐の旅に出ている！まあ、その魔王って俺の事なんだがな！魔王だって友達と仲良くしたいんだよ！それだけ！詳しい事情は『君との友情の為に魔族を統一しようと思った』を読めば良いんじゃないかな！けして丸投げなんかじゃないよ！

俺の代になって統一した魔族は、俺の意向によく従ってくれる。やっぱ誓約書に判を押させたのが良かった。今の時代、武力より紙だよね、紙。

それを良い事に、友情を深めるに困難は必須と考える俺は、正体を隠してディック達の旅に同行しつつ、他の魔族にお願いして勇者一行を襲わせている。

もちろん、旅の始めの頃は、一行が何とか追い払えるくらいにまで手加減させて。

俺の仲間を傷付けちゃただじゃおかねえ！理不尽じゃないよ。

しかし、そんな俺の真の目的を知っている者ばかりではない。先代魔王の時代から俺を知っている奴は俺の本質を正確に理解してくれているが、頭が固い奴らには俺の拳動を勘違いしている奴も多い。

「魔王様、私はもう堪えられません」

そう、ギブアップ宣言をしてきたのは、2メートルを超える巨体を
持つグレンだ。

筋骨隆々のいかにもな武人である。なんと素手で戦うのだが、ガン
トレットを嵌めるよりも破壊力は上だ。そりゃもう、比べられない
レベルで。本気モードになると腕やら頭やらに角が生えるんだぜ、
角。

愛称は『巨神兵』。怖がって誰も口にしないけどな。

パーティーの仲間達と川辺で休憩をしているとそばにある森からグ
レンの気配を感じ、何事かと慌てて仲間の輪から抜け、今に至る。

「どうしたっていうんだよ」

「誇り高き魔族がこのようにこそこそ…魔族であるならば正々堂
々名乗りを上げ、勇者に一騎打ちを申し込むべきでしょう！」

グレンは声高に言い切った。

や、良いけどね。外に聞こえないように魔術は張り巡らせてるし。

グレンは典型的な魔族だ。それでいて生真面目。強き者との戦いを
求め、より強き者への追従を望む。常に高みを目指すその姿勢こそ
が、魔族の誇りだと信じている。

そんなグレンだからこそ、勇者達にわざと撃退され、あまつさえ逃
げ出すなどは許されない行為だった。

生き恥を晒すくらいなら死んだ方がマシだ！というタイプなのであ
る。

仕方ない、と俺は溜息をついてグレンを言いくるめる為にあらかじめ用意していた言い訳を披露する。

「良いか？グレン、よく考える。強くなる為には試練が必要だ。しかし、ほとんどの魔族は勇者にさして興味がない。魔物を倒せるくらいにはなるだろうが、放っておけば勇者は成長しない。本来なら、その方があしらうのも簡単なんだろうが…」

俺はここでぐつと言葉に力を込める。ほら、俺の事を立派な魔王だと思いきんでくれるグレンだからね。こつという演出が意外と効くんだよ。

「俺は魔族として！否、魔王として！最強の勇者と戦いたい！その為ならば自ら試練を用意し、勇者を鍛え上げてみせよう！」

俺の言葉にグレンは雷に打たれたような顔をした。驚愕の顔でふらつく、膝の力が抜けたようにその場で膝をつく。

「何という深慮なお考え…やはり、貴方こそが我が魔王。浅はかなる私を、どうかご処断ください」

「グレンの憂慮も分からないではない。これからは一層励んでくれればよい」

「は！必ずや魔王様の為に、最強の勇者を育ててご覧にいれましょう！」

チヨロい。

チヨロいぜ、グレン。

俺、おまえのそういうところ好きだよ！

俺は晴れやかな気持ちでグレンと別れ、森の出口に向かう。みんなに見つからないよう結構奥まで入り込んでいたので、途中魔物を倒しながら森を抜けた。

「話はつきましたか？」

そこで、俺はぴたりと固まった。先程までの晴れやかな気持ちはどこへやら。血の気が引くと共に冷や汗が流れ、油の差していない機械の如くぎこちない動作で声の主を振り返る。

そこには、神々しい笑顔の魔術師、シルヴィオがいた。街を歩けば男女関係なく魅了し、エミリアが嫉妬するほどの美貌に微笑を浮かべ、木にもたれかかり腕を組んでこちらを見ていた。

「は、話って何の事だよ！俺はキラツと光るものが見えたから、宝箱かと思って見に行っただけだぜ！」

俺は貼り付けた笑顔で答える。

何でこいつがここにいる！と思って、結界を張っていると油断していた自分を悔いた。

シルヴィオなら、あの程度の結界も簡単にくぐる事が出来るかもしれない。

シルヴィオは、天才だ。人間として異常な魔力量　魔族の中でもトップクラスの魔力を持ち、それを操る技術までも当代かなう者はいないと言われていた。

かつては勇者候補として将来を囑望されていたのは伊達ではない。

その勇者としての未来を自ら放棄し、今ではディックがその立場を背負っている。

「……………そういう事にしておきましょう」

シルヴィオは目を伏せてふっと軽く笑うと、もたれていた木から背中を浮かす。すかした態度が妙に似合う奴である。顔か、顔なのか？

「私にはどうでも良い事です。人間が滅びようと、魔族が滅びようと。食いつぶし合うのが理想ではありませんがね」

「怖い事言っなよ!」

俺が魔王である限り、そんな事は決して許さない。俺が適当に魔族の手綱を握りつつディックとの友情を深めるには、平和な世界が一番なんだから!

「仕方がありませんよ、世の中が狂っているんですから」

「それを食い止める為に、俺達は旅をしてるんだろ」

「さあ、どうでしょう?」

まるで自分の目的は違うのだと、シルヴィオは意味深長に薄く笑みを浮かべる。

ゾツとする程不気味だが、正直、彼の気持ちも分からないではない。

この世界を愛する理由を、この世界によって失ったとき、彼こそが狂ってしまったのだ。

「遅かったな、アーヴィング」

川辺に戻ろうとすると、ディックがこちらに歩み寄ってきた。我が親友ながら、隙のない歩みである。

「あ、悪い。ちょっと道に迷っちゃって」

「おまえは迷子体質だからな」

皮肉を多分に混ぜたシルヴィオの微笑とは対照的に、ディックは親しみを込めた笑顔を見せる。

ちなみに、迷子体質は勇者一行を襲う予定の魔族達と打ち合わせをするためである。

「何だよ何だよー！心配して探しにきてくれたのか？」

「そうだな、と言いたい所だが…実はエミリアに追い出されたんだ。女同士の話をするらしい」

「エミリアらしいな」

苦笑して答えた俺の隣を、シルヴィオが通り抜ける。伶俐な横顔にはもう、笑みは浮かんでいない。

「私は水を汲んで来ます。アーヴィング、くれぐれも油断をしないように」

どこまで気付き、知って、何かを聞いたのか。腹の内の知れないシルヴィオは、俺に何一つ悟らせない。

「相変わらず、俺は嫌われてるみたいだな」

川上に向かうシルヴィオの背を見送り、少し寂しげに呟くディックに、俺は強く背中を叩いて励ます。

「気にすんな！いつか伝わる日がくるさ。俺とおまえみたいにな！」

シルヴィオは、かつて勇者という存在に絶望した。その為、勇者であるディックとは未だ溝を埋められずにいる。

けれど、その溝もすぐに無くなるだろう、と俺は楽観視していた。

なんたって、ディックは俺の親友なんだ！

人を信じる事を諦めないディックだから、誰もが彼に希望を見る。

シルヴィオも、きっと

(後書き)

読了ありがとうございます。

〈あとがきで人物紹介〉

アーヴィング：今代魔王陛下。その実態はディックとの友情に燃える少々残念な青年（見た目）。先代の崩御により、王位を戴く。魔族統一トーナメントを開催し、千人抜きを果たす。それによって力量を知らしめ、魔族を締め上げる事に成功？

ディック（20）：田舎の農村出身のお人好しな青年。巫女の託宣によつて今代勇者となる。基本的には落ち着いていて温厚な人物だが、内には熱いものを秘めている。お人好し故よく騙されるが、本人はあまり気にしていない。

エミリア（17）：街の孤児院出身。街の有力者に虐げられてきたので、基本的に権力者やお金持ちが大嫌い。孤児院存続の為なら手段を選ばず。冷めた物言いをするが、素直じゃないだけで面倒見が良いお姉さん気質。

ルイゼ（15）：聖なる巫女に仕える神官。おっとりしているが、好奇心旺盛で行動力がある。物心つく頃から神殿を離れた事が無かったため、色々なものが目新しい。現在は巫女の勅命と神殿の意向に従って勇者一行に加わる。

シルヴィオ（27）：元勇者候補兼裏切りの魔術師兼マッドな魔術師。純粹に平和を願う心優しき少年だったが、ある事がきっかけで

人間を憎むようになる。現勇者の理想論を見届ける為に一行に加わったが、平和を願う気持ちはない。

個人的には、もう一人マツチヨが加われば良いなあと思います。もしくはオネエ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3935y/>

君との友情の為に魔族を統一しようと思った ぱーと2

2011年11月10日09時35分発行